

世紀転換期における日仏文化交渉史（1890 1920年代）：フランス美術行政にみる日本美術観を中心に

著者	林 久美子
学位授与年月日	2016-04-28
URL	http://doi.org/10.15083/00075110

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 林久美子

本博士論文「世紀転換期における日仏文化交渉史（1890-1920年代）——フランス美術行政にみる日本美術観を中心に——」は、世紀転換期日本とフランスの文化的接触を文化交渉史として捉え、論じた力作である。従来「日仏文化交流史学」「ジャポニスム研究」「国際文化交流学」のような学問分野では、とくなくおざりにされてきた1900年前後の日仏の接触の様相が、新たな視点から書き直される。

従来この時期の日仏文化関係といえば、1900年パリ万国博覧会をはじめ、多くの事例が研究されていると思われがちであるが、意外にも先行研究の空白期間、エアークケットのような状態に陥っていた。すなわち日仏関係の黎明期（幕末から明治初期）ほど文化的興味を惹く時期ではなく、1900年頃にはジャポニスムも終着地点を迎えていた。そして第一次大戦後の日仏接近の機運や、藤田嗣治らの活躍が見られた1920年代にはまだほど遠い時期に当たる。しかしこの世紀転換期は、世界第二の植民地保有国として、帝国主義列強の中での自己再規定を図っていたフランスと、日清日露戦争を経て、帝国主義列強の仲間入りを果たそうとしていた日本という両国の時代状況を反映し、複雑な文化的交差の見られる、実は極めて興味深い時期なのである。そこで本論文は、政治と文化が密接に絡み合った日仏の文化的接触、すなわち日仏文化交渉と、フランスの公的組織における日本美術観という独自の新鮮な二つの主題からこの時期を捉え直すことに挑み、高い成果を上げている。

本博士論文は全三部、六章（および終章）から構成されている。ただ三部構成をとってはいるが、おおよそ前後半の二つの部分に分けられる。章立ては、緩やかに時系列順となっており、1900年の事象について論じる第Ⅱ部をちょうど重複部分として、前半部（十九世紀後半）・後半部（二十世紀初頭）としても捉えられるように構成されている。

第Ⅰ部「ジャポニスムブームから実像の日本へ」（第1章-第3章）では、フランス人挿絵画家フェリックス・レガメー（1844-1907）の活動を詳細に辿っている。レガメーは、ジャポニスムという芸術思潮においても、十九世紀の日仏関係においても、決して中心的な人物とは言い切れないが、ジャポニスムブームから文化交渉の時代へという流れを体現する稀有な人物である。日本に二度も来日し、多くの日本人洋画家たちと個人的交流があり、図画教育視学官として公的な職務もこなしたレガメーは同時に、パリ日仏協会という半官半民の組織を設立運営するなかで、公と民とを繋ぐ存在でもあった。従来よく知られる同時代の作家ピエール・ロティのオリエンタリズム的感性とはいかに異なる日本観を、その作品と活動を通して熟成させていったかが語られている。

第Ⅱ部「1900年という転換点」（第4章-第5章）では、1900年が日仏関係における重要な転換点としてクローズアップされ、パリ日仏協会とパリ万国博覧会がそれぞれの章で取り上げられる。すなわち1900年パリ万国博覧会において、ジャポニスム的日本美術観の修正を迫るような官製の日本美術史が日本側から提示され、その同じ万博を契機として、日仏文化交渉の舞台となるパリ日仏協会が創設されたのである。レガメーが発起人の一人として設立に携わり、彼の生涯最後の活動の場ともなった日仏協会は、その存在は知られつつも、これまで研究がなされてこなかった組織である。半官半民のこの協会には、外交官、政治家、収集家、商人、ジャーナリストなど日仏のさまざまな人材が集っていた。そこで醸成された人脈、繰り広げられた経済的交渉、そしてより広範囲にわたる日本文化研究こそが、政治と文化が密接に絡み合った20世紀の日仏関係だったことが明らかにされる（第4章）。第5章では1900年パリ万国博覧会の、とりわけ日本の出展方針が考察され

ている。ジャポニズムの影響もあり、日本の美術工芸はそれまでの万博においても高い評価を得ていたが、同時にそこでは日本の美術作品が常に工芸品として分類されてしまう、という長年の懸案が存在していた。日本にも西欧における「美術」が存在すると主張し、美術史と同時に国の歴史、そしてアイデンティティをもアピールするという目的をもって、1900年万博では日本古美術展が開催され、初の官製日本美術史が刊行された。この『稿本日本帝国美術略史』は、これまでも多くの先行研究で取り上げられているが、一方の日本古美術展そのものを詳細に検討したものはない。この章では日仏双方の新聞、雑誌などのメディア分析を徹底的に行い、日本古美術展の実態とともに、フランスにおける受容について具体的に明らかにしている。

第Ⅲ部では、二十世紀初頭のフランスの公的組織において、どのような日本認識、日本美術観が形成されていたのかが検討される。そこで取り上げられるのは、フランス美術行政による日本美術観を提示したルーヴル美術館と、フランスのアジア地域研究機関として設立されたフランス極東学院である。

第6章では、ルーヴル美術館への日本美術導入に大きな役割を果たした二人の立役者、ガストン・ミジョン（1861-1930）とレイモン・ケ克蘭（1860-1931）について詳細に論じられる。ルーヴル美術館の日本美術室は、多数の浮世絵の寄贈により1893年に開設されたとみなされてきたが、国立美術館古文書館の新出資料と、今回新発見の多数の新聞資料により、開設当時の様子が初めて正確に把握された。そして開設時には美術工芸部門、極東美術室に位置付けられた日本美術が、その後もルーヴル美術館内での分類闘争や地域闘争の中で翻弄されていった様態が明らかにされた。

終章では、1900年パリ万博の日本古美術展評を執筆して、日本研究者としての第一歩を踏み出したクロード・メートル（1876-1925）が取り上げられる。ジャポニズム的日本美術観から脱却したメートルは、日本美術を美術工芸や装飾美術のみによって捉えることはせず、最初から、日本美術における古代の仏教美術の重要性を指摘していた。やがてメートルは「極東」美術の枠内で日本を語る限界を悟り、極東学院を離れて総合的日本研究を展開する道を模索していったが、『日本と極東』という雑誌発行を含め、その圧倒的努力は、彼の死によって惜しくも絶たれる。筆者は従来ほとんど知られていなかったメートルの仕事とその意義を、その人となりの魅力も含めて、新出資料によって詳細に描写し得たと評価される。

なお林久美子氏は、本研究を進めるにあたりパリを中心としたフランス国内における調査を、留学およびその前後も頻繁に行い、数多くの新資料を発掘し、また従来知られる資料に対する新たな解釈を施すことに成功した。その意味では付帯する資料集に含まれる図版や作成表が、本文同様に貴重な役割を果たしていることを、最後に付け加える。

審査会では先ず一致して、意外にも先行研究のほとんど無い領域を切り拓き、収集や読解が容易でない日仏両国の公文書や新聞類にまで隈なく目を通して、世紀転換期の美術分野における日仏文化交渉史を生き生きと蘇らせた点が、高く評価された。とりわけ、1900年前後に重要な役割を果たしたパリ日仏協会の実態を可能な限り精査した第4章、レイモン・ケ克蘭、ガストン・ミジョンというルーヴル美術館における日本美術収集と展示を実現したコレクター、学芸員を縦横に論じた第6章が、本論文の白眉と言える。一方で、同時代英日文化交渉史を並行事例として見る必要性、日仏文化協会の雑誌の記事全体をより詳細に分析する必要性、メートルを論じた終章は第7章として格上げする必要性など、多くの提言がなされた。

しかし以上の指摘は、あくまでも今後の研究の進展と論文公表の際のさらなる希望として語られたものであり、本論文の価値を損なうものでないことも確認された。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。